



熊本市街を望む清正(熊本市本妙寺山)

川の傍らの小さな石垣。そこに秘められた名君の思いを知る人は少ない。石垣は四百年も生きてきた。緑川を守る土手として、小さく見えても、大勢の仲間とこの辺り一帯を守ってきた。何度も危ない目に合い、とりわけ、寛政八年(一七九六)の洪水の時、体のあちらこちらが崩れてしまった。なにしろ、生まれて二百年も経っていたから。その時、初めて石垣の本当の姿が現れて、皆、驚くこと。表面の石垣が崩れても、いいように、二重になっていたのだ。

完成して二百年の後、改めてその偉大さを知らせた石垣の作者。その人の名は、加藤清正。数々の戦で手柄をたてた武勇の人。天下の名城、熊本城を造営した築城の天才。治水・土木工事になみなみならない手腕を発揮した土木の神様。そして、亡くなって四百年近く経った今も、熊本の人から親しみをこめて「セイシヨコさん」と呼ばれる、一代の名君。清正の在位、わずかに二十三年。

故荒木精之氏は、著書「加藤清正」の中で、その不思議さを繰り返し語る。干拓・治水事業は「意地悪く言えば、百姓農民の尻をひっぱりたい。おのれの増収をはかった、ともいえよう」。にもかかわらず、「その苛酷さ、重圧政治」について語られることはない。あるのは、民への深い思いと人柄の高潔さを称える言葉ばかり。

その「不思議さ」の答を、石垣が教えてくれた。

「国家百年の計」どころではない。清正は、「二百年の後」を思う政治家だった。石垣は、ほとんどコンクリートの堤防の下。しかし、小さな石垣が話す偉大な為政者の物語は、いつまでも語り継がれる。

”二百年の後“へ——名君の遥かなまなざし